

# 内藤新宿の人とくらし

——十八世紀中頃の絵地図を手掛かりに

増田 廣 實

今日は文芸学会だということで、一年に一遍皆さんのそれぞれのゼミでの成果ある発表を次々されておりまして、こんな喜ばしいこととはございません。

今日は、『内藤新宿の人とくらし』ということで題を設定しまして、「十八世紀中頃の絵地図を手掛かりに」という副題を付けました。そこで、私は一番最初に「現在の副都心新宿の発展は、近世江戸の西側の出入口として甲州街道・青梅街道の分岐点に設置された宿場「内藤新宿」に始まる。今見ることでできる旧名主「高松家」文書中の一枚の絵地図は、十八世紀中頃当時の内藤新宿の姿を語りかけてくれる。以下絵地図の歴史的位置付けと共に、そこでの人とくらしの様子を見ることにしたい」、こんな問題設定をいたしました。皆さんの知っている新宿は、江戸時代に内藤新宿と言われています。その内藤新宿には、甲州街道が貫いております。また現在の新宿御苑という場所は、江戸時代長野県の高遠というところの藩主である内藤家の下屋敷だったところです。ですからここが内藤家

の下屋敷のある場所ということで『内藤新宿』と呼んだのです。これが今の新宿の前身です。

現在の新宿の中心は江戸時代の内藤新宿に比較すると、西に寄っております。

次にどんなふうにして内藤新宿という宿場ができてきたかということ時代を追ってみたいと思います。

一番最初、天正十八年（一五九〇）徳川家康が江戸城に入ってきた。この時に内藤清成公という者に、現在の新宿御苑のところを屋敷地を与えたのです。そのためやがてこの地域を内藤新宿というふうに呼ぶようになってくるわけです。

そして、この慶長五年（一六〇〇）という年に関ヶ原の戦いが行われまして、徳川家康が関ヶ原の戦いに勝ちますと、ここからが江戸時代、江戸幕府による江戸の政治が始まってくるわけです。實際に將軍になるのはこれから三年ほど後ですが、まずその翌年の慶長六年という年の一月から東海道の宿場を作ることを開始しております。

す。そして江戸を中心に五つの街道を作り上げていくことをやるわけです。

そのようにして、宿駅制度が開始されてきて、東海道品川宿、中山道板橋宿、それから奥州・日光街道の千住宿や、甲州街道高井戸宿などが、この時期にだんだん成立していくわけなのです。まだこの初めの時期は、実は内藤新宿は宿場ではないのです。ところが、江戸時代になりまして、だんだん江戸城ができてきて、西へ西へと江戸時代が広がりをを見せてくる。そしてやがてこの甲州街道沿いのところもだんだん町場になってくる。そして、寛永二年（一六二五）頃になって江戸城の外堀が、現在の四谷から赤坂に掛けて作られています。江戸城が外堀まで広がり、外堀の外のところは四谷の町々ができ上がってくるというふうにして、江戸の町がだんだん西へ発展をしてくるわけです。

そしてどういふふうになったかという点、四谷の内藤の屋敷の主である内藤清枚（きよかざ）、この人が元禄四年（一六九一）信州高遠の藩主になる。信州高遠というのは甲州街道の一番先のところであり、その藩主になったわけです。

そして、元禄十年から十二年にかけて、高松という人物を中心として、この高井戸と日本橋の間が二〇キロメートルもあるから、その途中に宿場を作りたいという願書が出されて、幕府に五千六百両のお金を献金するから宿場を作らせてくれということで出来てくのが内藤新宿という宿場であるわけです。

そんなふうにして内藤新宿が出来ますが、その後享保三年（一七一八）に、内藤新宿は一時宿場が中止され、そして更に明和九年（一七七二）に宿場が再び開かれて、明治五年（一八七二）まで宿

場として続くという、歴史的な流れとなるわけです。

今日お話ししようとしている内藤新宿の町の様子というのはいつ頃の話かという点、大体享保三年に廢駅になって、明和九年に再建立されたこの間、ですから一七〇〇年代の大体半ばぐらいの時期を対象にして、表題に掲げました「十八世紀中頃の内藤新宿」ということになるわけです。

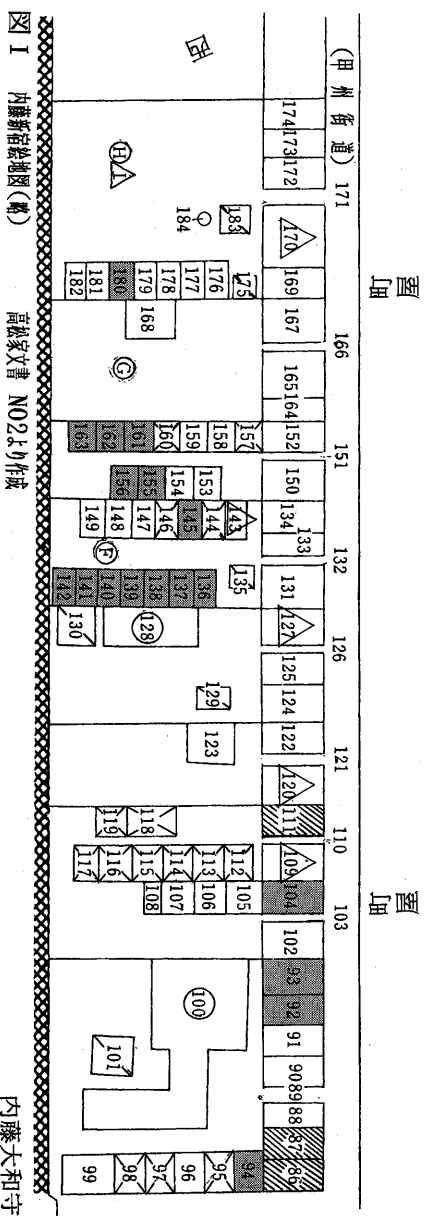
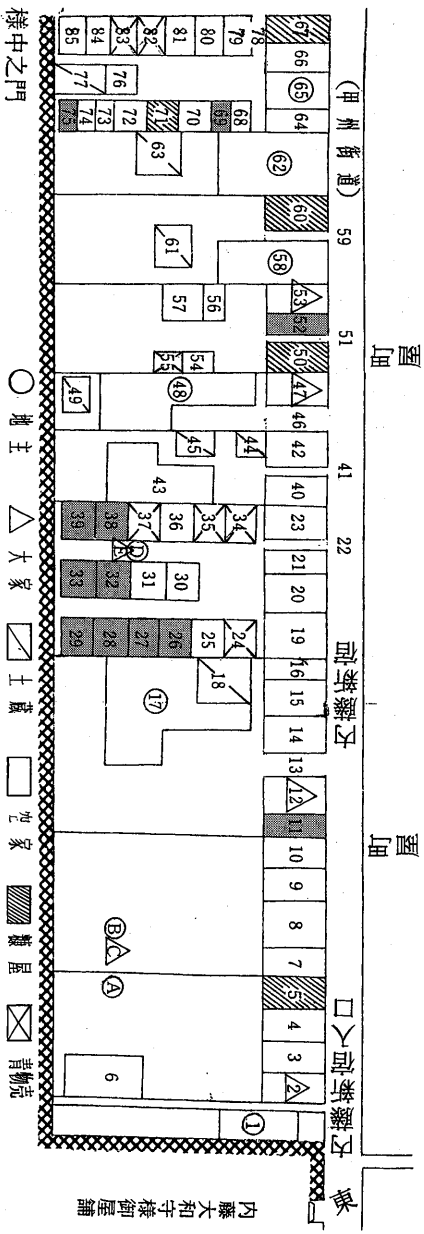
今日取り上げます内藤新宿の宿駅機能と絵地図には下宿と書いてありますが、シモマチと言っているようですが、この絵地図のことをお話をいたします。

その下宿（シモマチ）とは、内藤新宿の甲州街道に浴った町並みの中で、一番江戸に近いところを呼び、真ん中のところが中町、一番江戸から遠いところ、いわゆる京都に近い一番西側が上町と言われました。今日お話しする絵地図は、この下町の絵地図です。

さて、宿場というのはどんな働きをする場所かということをお話し申し上げます、宿場は大きい仕事有二つあります。

一つは継立と言いまして、問屋場というものがあって、前の駅から送られてきた荷物を、馬や人足に積み替えまして、次の宿場まで送るといふ仕事なのです。それを継立と言います。そういう仕事は誰が受け持つかという点、宿場の家持ちの人達が人馬役として負担します。そして宿内の人馬で間に合わない時はどうするかという点、近辺の村々に馬や人足を頼む、それが助郷という制度であります。

それからもう一つ宿場の大きい仕事は、旅人が休んだり泊まったりする宿屋や茶屋などを設けるといふことです。本陣だとか、旅籠屋だとかいうものがありまして、そこでお客さんを泊めたり、休ませたりするわけです。そういうことになりまして、当然というか、



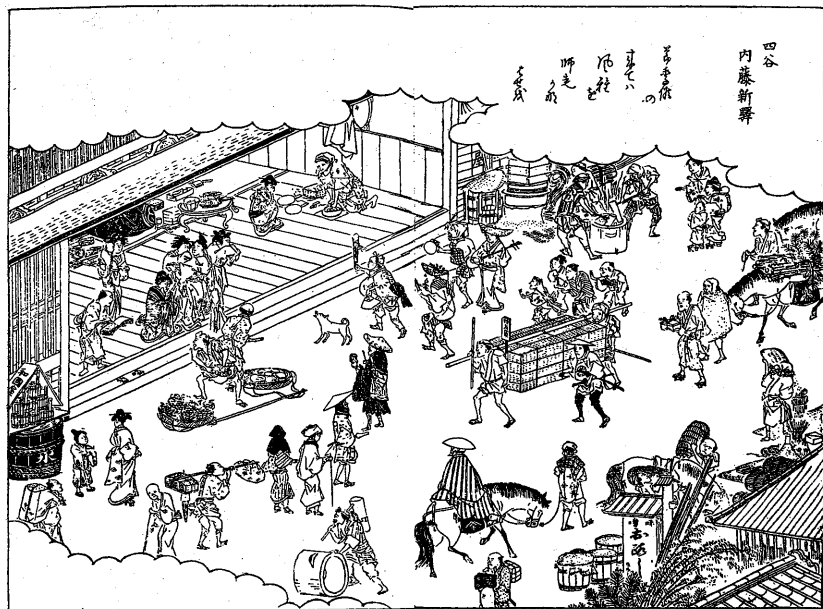
そこにはお客様をあしらう女性達の存在が出てくるわけです。それが飯盛り女と呼ばれる女性達なのです。新宿は非常に飯盛り女が多かった。

先ほどのお話を思い出していただきますとお分かりになると思いますけれども、高松は宿場を許可してくれば五六百両のお金を幕府に献金（いわゆる政治献金ですね）するということで認められた。そのお金はどこから入ってくるのか。これは飯盛り女を置いた旅籠屋、これを飯盛り旅籠と言いますが、そういう旅籠屋が女性を置くことによって稼いだ上前をはねて、それを幕府に献金するという仕組みがその陰に隠されていたわけです。ですから五千六百両もの金を献金しても、幕府から宿場として認められれば、高松達は十分採算が合うと考えたわけです。そんな事情があつた時は宿場というものの中に隠されているのです。

そういうことから改めて今日問題にしようとする地図のことを考えてみますと、実はこの地図には旅籠屋が一軒も出てこないのです。本陣も出てこない。まあ本陣は下町じゃなくて中町にあつたようですから出てこなくても当然ですけれども、いわゆるこの地図には宿場としての性格を示すような証拠が何も無いということなのです。そのことが先ほど言った、年代は書いていないけれども、この下町の地図は宿場でなかった、少なくとも享保三年から明和九年の、一七〇〇年代の前半の時期の地図であろうと推定をしているわけです。

では、次に下町の絵地図を見ましょう。

今日取り上げます絵地図の略図はどれかというところ、上の絵地図と下の絵地図なのです。（図一）これは二枚の絵地図であります、実は本来は上の絵地図の左端と下の絵地図の右端とが続いた一枚で



図二 四谷内藤新井 高橋月琴「江戸名所図会」より

す。この上の絵地図の一番右側のところは、現在の新宿御苑に入る入り口でして、内藤家の正門の位置がここなのです。そしてこの上下の絵地図の繋ぎ目のところが、内藤家の中門になっているのです。そのことから下町の位置というのが明確になってくるのです。

この地図を見てくださいと、一番上のところの内藤新宿という地名が出てきまして、そして実はこの一軒一軒の上のところには入り口の長さが書いてあって、その下には、その一軒一軒の家の家主の名前が出てくる。そしてこの表通りに対して、路地裏側にも通りがあるという、こういう形でいろいろなことが書かれているわけでありませう。

天保期に描かれた『江戸名所図会』の中「四谷内藤新駅」と題した絵図(図II)を見ると、旅籠屋が描かれています。そこには遊女達がたくさんいる様子が分かります。それから長持ちを担いで行く人がおられますし、馬に乗って三度笠に合羽を着た旅人が江戸の方に進んでまいります。また「味噌多し」と書いてあるお味噌屋さんの看板がここに出ていたりなんかしていますし、右のところを見ますと、荷物を積んだ馬が入ってくる様子や野菜などを天秤棒で担いで売りにくるような人達が居ることが分かります。

ちょうど今お話ししようとしている絵地図からは七・八十年から百年近く後のものでありますけれども、内藤新宿の町は、こんな様子だったことが分かるわけです。

さて、本題の方にいきましょう。内藤新宿下宿、いわゆる下町の南側の実際の町の様子はどうかだったかということです。

これはこの地図を見ただくと分かります。この番号のない白地の部分が地面です。番号のつけてある部分というのは何かという

と建物、屋敷・土蔵なのです。そして真ん中の90番のは何かというところ、これは町番所と言いまして、下町の取り締まりをするための番屋なのです。そして、この前のところの通りが甲州街道です。道に沿って表通りとなるわけです。そしてその通りの後ろ側のところ、例えば24番からずらずら並んでいるのは長屋なのです。この長屋は甲州街道から曲がり、22番などの路地を入りますと、棟割り長屋が並んでいるわけです。ですから、この町の姿というのは、甲州街道に沿った表通りの商店街と、そこから路地をそれぞれ入った路地裏側の長屋によって町が作られていることが分かります。この家数を勘定してみますと、全部で百五十五軒あります。そのうち表通りは六十一軒(番所一軒を含む)の家がありまして、そして路地裏のところには九十四軒の家があることが分かります。ところが、この表通り六十一軒の家の内11・52番など五軒が空き家なのです。特に、路地裏の九十四軒の内、長屋が八十六軒があるのですけれども、この八十六軒の長屋の内二十四軒、大体二八%ぐらいが空き家なのです。

これはどんなことを意味しているのかというと、先程も申し上げた通り、この絵地図が作られたのは内藤新宿が宿場でなかった衰退期であつたことを物語っていると思うのです。

そんなことからこの内藤新宿は、この絵地図で見る十八世紀の半ばの時期にはかなり衰退し、にぎやかさが失われていた様子が見られるわけです。では次に町の様子はどうなふうだったかということとで、この町の人達の身分も追ってみようと思います。

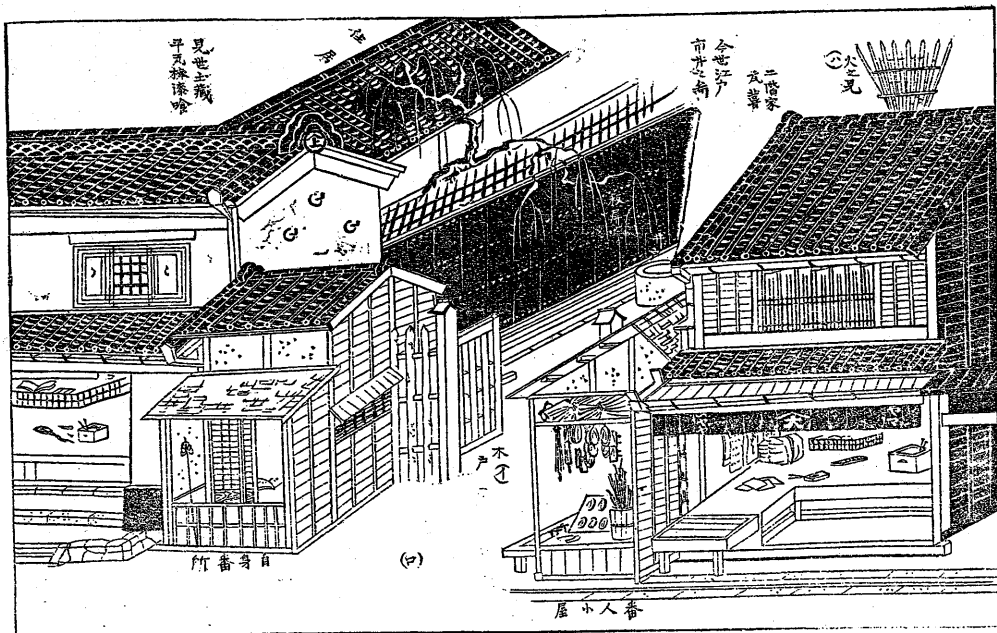
土地持ちである地主と、家持ちである家主、それと土地や家を持つていている人に代わって、その土地や家を管理する大家さん達が中心

となつて町(宿)を支配しているのです。その大家さん達はどこに住んでいるかというと、2・12・47番や120・170番のように大体甲州街道に面した表通りに住んでいる。これに対して地主は、例えば一番右のところを見ると、Aというの不在地主です。Bも不在地主、それから一番端になりますが、Hも不在地主なのです。そしてCやEは、大家さんです。

例えば、あのAの土地は誰が持っているかというと、これは不在地主とは言いませうけれど、48番です。これはお医者さんなのです。48番が地主になっておりますから、完全な不在というわけではありません。全部を見ますと地主が十四軒、そしてその地主の内八軒は町にいますけれども、六軒はこの町に住んでいない、他所の町の人達が地主になっている様子が分かります。それと同時に、大家は十軒あるのです。十軒ありますけれども、その内のC・E・I三軒は町に住んでいない大家さん達なのです。

そういうことから分かりますように、とにかく家や地所を持っている地主と、それに家や土地の管理を任されている大家さん達がまず町の中心になっていて、そしてその下に地借りと言ひまして地所を借りている人や、それから店借りと言ひまして長屋を借りて住んでいる人達が沢山いて町は成り立っていました。その地借りや店借りの人達の大部分はどこに住んでいるかというと長屋住まいであることが分かりますが、この地借りや店借りのことはここに出てきませんから、あまり正確な数字を把握することは出来ません。それから大きい地主達はどこに住んでいるかというと、あの58番と62番、65番は表通りに確かに住んでいます。特に58番と62番は表通りに住んでいるけれども地所が広いですね。

今世江戸市井之圖



図Ⅲ 今世江戸市井の圖(大通りの商家・町番所) 喜多川守貞『近世風俗志』より

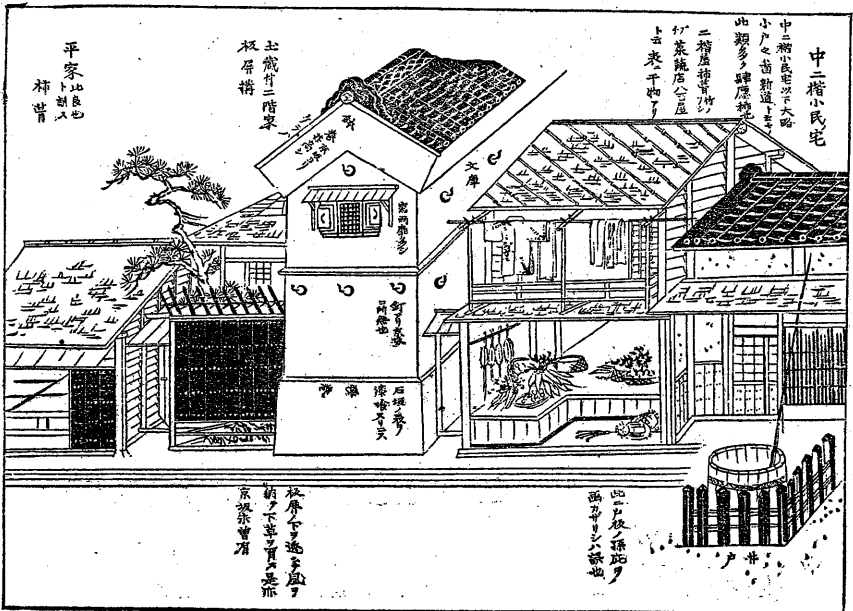
それからあとの大部分の地主達は裏側に住んでいる。例えば100番の地主などは、大変広い鉤型の家を作って住んでおります。ですからあそこの一角は多分94番から99番までの長屋は、あの100番の地主が持っているに違いないし、ひよっとすると86番から93番までの表通りの店の地所も持っているかもしれない。

例えば100番はあんな大きい家に住んでいて、土蔵(101番)もちゃんと持っているのです。例えば63番は、62番の家の土蔵、58番の家の土蔵は61番のものだということも分かります。それから右側の方の17番というのがありますが、この17番は実は紀州の徳川家に入りにしている植木屋さんです。ですから、ただ植木屋とは書いてなくて、「御植木屋」と書いてあるのですが、あの18番の土蔵も17番の植木屋さんが持っていることが分かります。

ですから、そういうことからすると、江戸の端にある内藤新宿はやはり江戸の町と同じように、家主や大家を中心として、多数の長屋の人達によって構成されている様子が分かります。

そういう家の様子を見ることが出来る資料があります。これは天保期以後の様子を描いた『近世風俗志』という本から取った絵です。この上の絵(図III)は、「今世江戸市井の図」と書いてありますが、こういって二階建てのお店屋さんがある。そしてこの小路に張り出した部分は何かという、これが町番所なのです。こういう大きいお家の道の角のところにあるのです。

さっき絵地図で見たものもそうでした。路地の入り口のところには90番だったかと思えますけれども町番所がありました。だから、こんな風な表通りの様子だったことが、この図から想像できます。

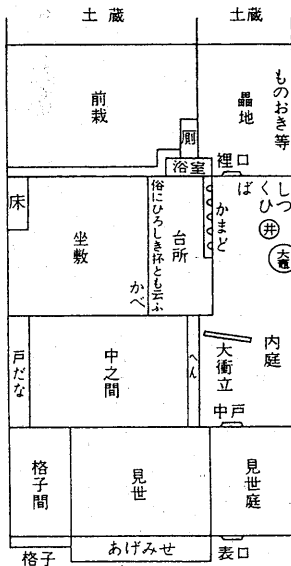


図IV 中二階小民の宅 (柿書中二階屋の八百屋) 喜多川守貞『近世風俗志』より

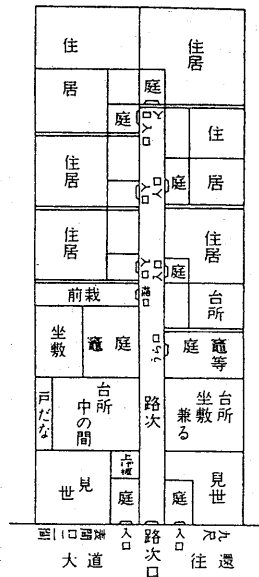
それからこの下側の図(図IV)ですけれども、これは八百屋さんなのです。二階に物干し台があって、上は瓦葺きではなくて、いわゆる板葺き(柿葺)なのです。トントン葺きなどと言われるもので、す。ですから、表通りの家も必ずしも瓦葺きばかりではなくて、こんな家もあり、八百屋さんの店先などというのはこんな感じで、左側の壁のところにはぶら下がっているのは、これは草鞋、草鞋なども八百屋さんが売っている様子がこの図から分かります。内藤新宿の町も多分こんな姿をしていたのだらうと思います。

また家々の大きさをみてみますと、次のようなことになります。これも同じ本から取ったこの絵図(図V)を見て下さると、ここに表間口二間と書いてあります。二間というのは三・六尺、奥行きが四間の家なのです。そうしますと、この大きい通りに沿って、まずお店屋があって、自分達の住んでいる台所、中の間があって、一番奥に竈(ヘッツイ)、庭があって、ここに簡単な座敷がある。後の部分、「前裁」と書いてありますけれども、小さい庭です。そういう家が大体表通りの家だということが分かります。それから路地裏はどうなっているかという点、いわゆる長屋のスタイルです。だから長屋のスタイルというのは、例えば左側中央の家のように、住まいと店先がちょっとあって、入り口があるだけの住まいだということが分かります。

ですから、表通りのこういった間口二間ぐらいの家は、新宿の絵地図を見ますと沢山出て来るのです。そしてもう一つ、もうちょっと大きい家になるとどうかという点、これは間口四・五間という家です。(図VI)店があって、格子間があって、ちょっとした見世庭があって、ここからずっと裏へ抜け



表間口四、五間の宅なり



図V 小戸の図(表間口二間の宅・長屋) 喜多川守貞「近世風俗志」より

図VI 中戸の図(表間口四・五間の宅) 喜多川守貞「近世風俗志」より



れるような構造になっているのです。そしてこの内庭が通って、衝立などがありますけれども、その奥に井戸物置などがあって、土蔵が後ろにある。そして家の店の中には中の間があって、台所と座敷があって、奥に庭があるというような構造を持っている。

ではこんな家々は実際にあったのか。もう一回絵地図を見てみますと、かなり具体的に分かるのです。1番、2番、3番、4番、5番辺りの家が、これがさっき出てきた間口二間というところ。間口二間で、奥行きが四間の家がずっとここに並んでいるのです。

それから間口四・五間という大きい家というのは、これがいい例なのです。170番、これは真四角の四間×四間です。この家は足袋屋さんなのですけれども、こういう家が今出てきた大きい方です。そして62番、58番は、さらに大きく四間×7間の家です。

ですから、これで見ると限りは表通りには一間半から四間ぐらいの家々が並んでいて、そして間口が二間という家が実は二十四軒もあり、表通りの六〇軒の四〇パーセントを占めています。そして平均二・二五間ぐらい、いわゆる二間ちょっとぐらいのものが平均値になると思います。

ところが路地裏はどうなっているかということですが、路地裏は、八十六軒ある長屋は間口が一間から、一番大きいので四間なのです。それで平均的には二間×二間なのです。二間×二間です。からどんなことになるかというと、ほぼ真四角に書かれています。この八六軒中六六軒が、二間×二間の家々であり、約七七パーセントがこれで占められています。そうした中では99番は目立って大きい家です。これは長屋を二軒ぶち抜いてしまい、二間×四間の家なのです。これは何をやっているかという、寺子屋なのです。で

すから、寺子屋などというのは路地の奥のところにあつて、決して表通りにはなかつた様子が分かつてくると思えます。

最後のところで、では町の人達の生活はどういうことになっているかということをお話したいと思います。

町の人達の生業を調べて整理しますと、次のような商家が多いことがわかります。①古鍋だとか古着を売買する古物商。②食べ物に關わっている家々。③職人だとか、物を作る仕事に携わる家々。④八百屋さん。それに皆さんには耳慣れないかもしれませんが、⑤糠屋<sup>カ</sup>と言ひまして、米糠を売っている家々です。何で米糠を売っているのか。米糠というのは、実は畑の肥料にします。糠屋は肥料商なのです。

今、特に注意したいのは、この緑色の八百屋さん<sup>カ</sup>と畑の肥料にする糠屋さんとが、この新宿の町にかなりの数があるということです。これは何を物語っているかという、さつき見たように馬の背に野菜を積んで新宿の町に売りに来た農民達は、帰りに畑の肥料にする糠を糠屋で買って帰った。その時に、多摩地方から出てきた農民達は、自分達が必要な古着や古金もここで買い、簡単な食事をここの食べ物屋でして、帰って行く姿を、この絵地図から読みとることが出来るのです。

町の町人の生業を数的に見てみますと、表通り五十五軒あるうち地主が四軒、大家が八軒、それから糠屋が七軒、古着屋が四軒、古金屋が三軒、古道具屋が二軒あります。それから食べ物関係では、たばこ屋・豆腐屋・煮売屋・餅屋・うどん屋などは各二軒ありますし、水菓子屋・酒屋・煮豆屋・醬油屋・干魚屋・青物売り・粉屋などは各一軒です。それから桶屋・股引屋各二軒、股引というのは下

着です。それから足袋屋・絹屋・指物屋・提灯屋・柵屋などが各一軒あり、こういうような店々が並んでいる様子が分かるわけです。

それから更に路地裏の状況を見てみると、家数は六十二軒ありますけれども、六十二軒の内大家が二軒、青物屋が二十三軒、日雇五軒、古金買二軒（これは屑屋さんですね）、古物屋が一軒。飴売り・塩売りが各二軒、膏薬売りだとか本屋が各一軒、それからたばこ屋が二軒、たばこ屋と言いましてもこれは刻みたばこを作っているような職人だろうと思います。大工が三軒、左官・屋根屋・米つき・足袋・股引、いかけ屋と言いまして、壊れた金属を繋ぎ合わせる仕事をしたり、鍋などを直すような仕事をする職人や塗り屋が各一軒、そのほかには豆腐屋・粉屋だとかも各一軒あります。これはいづれも小さい商人や職人たちです。そして更にその他には鍼医（あんまさん）が二軒あったり、寺子屋の師匠がいたりしています。

そのように裏長屋に住んでいる人々は、地主を除けば大部分の者が小商人と呼ばれるような、小さい商売をしながら細々とした生業を営み暮らしている者たちであることがわかります。このうち二十三軒もある八百屋さんは、さっきも言いましたように、住まいとお店を合せても二間×二間、いわゆる八畳くらいの広さしかない家で商いをしたりまた行商をしたりしており、そうした八百屋に代表されるような人々の暮らす長屋が、八十軒並んでいる状況が裏長屋での生活実態であったわけです。

いわゆる表通りと路地裏とは、住む人も商売も、そして彼らの暮らしも、雲泥の差を持って出来上がっていることが分かってくるわけです。

最後に結論めいたことを申しますと、近世江戸の膨張と発展と

もに、東の方から江戸がどんどん西へ西へと発展してくると、それにつれて、西郊の地域は次第に江戸の町の一部となり、やがて町奉行の支配地に組み込まれて町に変わっていきました。内藤新宿もまた甲州道中の宿場の一つとして西の多摩地域と、東の江戸との関わりの中で発展したのですが、間もなく宿場の廃止の憂き目をみて衰退の時期を迎えました。しかし、十八世紀中頃の新宿の姿は、この一枚の絵地図から見られるように、依然として江戸と多摩地域との接点にあったのでした。当時もまた内藤多摩地域の人々の生活の延長の中にあると同時に江戸の場末、多摩の花のお江戸の入り口として位置付き、それを反映したこの人々の暮らしがあったのです。しかし、それはただ東の華やかな江戸と、多摩地域の田舎とを繋ぐ役割だけを担うものではありませんでした。そこでは、表通りに住む人達と裏通りに住む人達、表通りの家持ちや地所持ちと、路地裏の長屋住まいの人々との対照的な暮らしがあったのでした。

我々歴史を勉強する者は、二つの視点が必要です。一つはその時代はどうだったのかと言う視点であり、もう一つはそれを現在と比較したらどんなことが見えるだろうかという視点です。およそ皆さん方は現在華やかな新宿の町、あの高層ビルに囲まれた新宿の町並みの中から、この江戸時代の裏長屋住まいの人達の生活などは想像することが出来ないかもしれません。しかし、現在とでも、新宿の町の表通りとはまた違った裏通りの姿もあることをわすれてはいけません。そういうことで見ていきますと、この一枚の絵地図は何を語ってくれているか、十八世紀の半ばの内藤新宿という一地域の人々の暮らしをこの絵地図の検討の中で浮かび上がらせることが出来やしないかと私は考えたのです。

私はこの絵地図に最初宿場ということに関心を持ちました。この高松家の絵地図の存在は以前から知っておりました。しかし、今回改めてこの絵地図をみまして、今日お話ししましたような様々な点について知ることができました。歴史などというのは皆さんに縁遠いものと思っているかもしれませんが、歴史は皆さんの身の回りに常にあります。いわゆる歴史とは、特別な人が特別なことをやったことではなくて、我々の祖先がどんなふうに移らしてきて、我々にどのような繋がっているかということを考えることであるとすれば、我々の身の回りに沢山の歴史が積み重ねられて今日を生み出していると言えるわけです。どうぞ皆さんも、今日こんなお話をしましたけれども、機会があったら回りに目を向けてみて、歴史の流れに関心を持っていただくことも大切なことと思います。

非常に端折って、駆け足でお話をしましたので、皆さんにはあまり面白くなかったかもしれませんが、お付き合い頂きどうもありがとうございます。

(平成十年二月八日、第三十三回文芸学会講演より)

平成十年度 文芸学会 ①

十二月八日(火) 於 茅ヶ崎市市民文化会館小ホール  
(研究発表)

一、TV・ニュース番組のキャスターについての調査と研究

二年 佐藤ゼミ 加藤ヒトミ・原田奈津子・平野恭子

二、文庫市場における幻冬舎文庫の参入

二年 飯野ゼミ 川島知子・木村真由子

三、時代に翻弄された『白雪姫』

二年 中島信子ゼミ

上村麻子・大崎篤子・皆川瑠美

四、少年犯罪と少年法改正

二年 中島善範ゼミ

鈴木まゆみ・長谷川涼子・永野陽子

ゼミ紹介 二年全ゼミナール

五、ジェンダーフリーの現状―歌詞・映画・化粧からの分析

二年 井上ゼミ 奥脇真紀子・国井咲枝・米山敦子

(講演)

「内藤新宿の人とくらし―十八世紀の絵地図を手掛かりに」

本学教授 増田廣實 先生